

創立の精神と私

高 村 忠 成

只今、ご紹介にあずかりました高村でございます。今日は、「創立の精神と私」というテーマでお話させていただきますが、話の骨子は、「創価教育とは何か」ということを私なりに展開させていただきたいと思っております。創価大学での約34年間、私が創立者池田先生からお聞きした話を私なりに整理し、「創立の精神」、すなわち、その核をなす「創価教育とは何か」という形でお話してみたいと思います。

近年、各大学とも、単にその大学に入って勉強するというだけではなくて、大学の歴史、大学の精神、いわばDNAといいますか、その大学の遺伝子情報みたいなものをしっかり身に付けて、建学の精神を焼き付けた、その大学の学生らしい学生にしていこうという動きが活発です。慶応大学には、そういう伝統がありますし、早稲田大学にもそうした講座がございます。最近では、九州大学等の国立大学でも九州大学の歴史、建学の精神を学ぶ講座ができています。創価大学においても、「建学の精神、創立者の精神とは一体何なのか」ということを深く身に帯していくことが大事なのはいうまでもありません。

では、これから、順次、このテーマについてお話させていただきます。

創大教員になった理由

最初に、私が「創大教員になった理由」をお話ししたいと思います。私は元々の生まれが日本橋の料亭の息子です。いわば、教育とか大学とかとは全く関係のない世界で育ってまいりました。大きく料亭をやっておりましたので、私はゆくゆくはその料亭の後を継ぐか、あるいは、いきなり継がないまでも、途中、社会に出て修行をしてから料亭の後継ぎになるかなと思っておりました。ただ、祖父や親父は、昔の高等小学校しか出ておりません。それで、大きな料亭をつくったものですから、きっと法律や会計・経理の問題など、分からない点がたくさんあったのでしょう。そうしたことから、祖父や親父は、「これからお前が何になるにせよ、大学だけは出なければいけない」といっておりました。そこで、私は子ども心に大学に行くのは、あたり前であると思っていました。大学に行っていっていったん社会に出て修行をして、それから家の後を継ぐというのが、私の将来設計だったのです。ただ、「では一体、社会に出た時にどういう仕事に就くのか」という問題がありました。

その頃、東京オリンピックが開催される寸前でありました。東京の街をあげて、いな日本をあげてオリンピック一色でした。街には、雨後の筍のように英会話の学校がたくさんありました。まさに、東京オリンピック一色でした。そんな風潮に影響されまして、私は、「これからは世界だ。とにかく世界に出て、いろいろなものを身に付けてから自分の仕事に役立てよう」と決意しました。そのため、世界に出て仕事をするならば、「貿易商社がいい。貿易商社に入って世界を回り、仕事の経験を積んでから自分の店の後を継ごう」と決めました。そして、高校時代は、学校が終われば英会話の学校に行ったりしておりました。

そんな折、1964（昭和39）年6月30日、私が大学3年生の時、池田先生が出られた会合にたまたま参加することになりました。その会合は、創価学会の第7回学生部総会でした。そこで、私は初めて池田先生にお会いしたのです。その時池田先生は、「創価大学を将来つくる」という方針を発表されたのです。そして、「どうか、この中から、創価大学で教鞭を取る人が出てもらいたい」と訴えられました。その時私は、大学の話に関しては、あまり印象に残りませんでした。自分の将来は決まっていたので。しかし、池田先生の熱烈たる青年、学生を思う、その情熱には感動いたしました。以来、「先生の下で何か役に立つ仕事をしたい」という気持ちが私の生命の根に刻印されました。

そして、いよいよ具体的に会社を決める大学3年から4年の春休みに、私は「貿易商社に入るのもいいけれども、できるなら池田先生の役に立つ仕事に就きたい」という思いが募りました。「そういえば、確か昔、先生が『創価大学をつくる』という話をされたな。それじゃ、自分は、創価大学で働かせてもらおう。教員になろう」と決意するにいたりまして、大学院に進学することにしました。その間、いろいろなことがございましたが、結果的には、運良く創価大学が開学する時、1971（昭和46）年4月に法学部の助手として採用されまして、開学の一翼を担わせていただくことができたのです。従って、私の人生というのは、「もし、あの時、昭和39年6月30日、池田先生との出会いがなかったら、先生の情熱に触れなければ、私の人生は大きく変わってしまったのではないか」と思うのです。考えてみると、人生というのは不思議なもので、ある時、ある人との出会い、あるいは、ある書物との出会い、または、あるところに旅行へ行った時の経験、こういうもので、「自分の人生はいかようにでも変わるのだな」と思うのです。特に、どういう人に出会うか、どういう思想、哲学に巡りあうか、ということが大切だと思います。それによって、思わぬ方向に行ってしまうというのが、私のささやかな経験からいえるのです。

創大開学を期待する識者の声

創価大学が開学される前の1969（昭和44）年、池田先生は恩師戸田城聖先生の構想実現のため、あるいは、将来の人材を育成するため等の理由から、創価大学をつくる具体的準備に着手されました。当時は、学生運動の嵐が吹きあれておりました。いわゆる、全共闘の学生たちは大学解体というようなことを叫んでいたのです。そうした混乱した教育界、また大学の現状の中にあって、多くの識者が「これからの大学はどうあるべきか」ということをいろいろと論じておりました。その中に、フランス文学の我が国最高峰といわれた河盛好蔵先生、もと共立女子大学の先生でございますが、先生が1970（昭和45）年、ある雑誌に次のような一文を書かれました。「私は、いまの日本は、全部が東大という呪縛にしばられているような気がする。それから解放されるにはどうすればよいか。東大をつぶすのが一番近道であるが、それはできない相談であるし、またそんな必要もない。それより、内容も設備も東大に数倍するような新しい大学を作ることである。（中略）その点、創価学会が新しい大学の建設を企図しているのは、先見の明に富むものといわなくてはならぬ」（『東大は諸悪の根源』『河岸の古本屋』毎日新聞社昭和47年）と。「まさに、新しい大学をつくるということ、これが今の大学問題を解決する一番重要なポイントである」と指摘されたのです。池田先生はこの指摘の先を行くがごとく、「人間教育」を掲げて、創価大学を開学されたのです。

新しい大学の、すなわち創価大学の「創立の精神」は、「人間教育」でした。また、当時の大学は、「大学は研究機関である。大学は真理発見の場である」というように、ややもすれば、

研究に重点が置かれ、教育というのは研究の隠れ蓑になっておりました。更にいうと、学生は二の次で、大学は教員が中心でした。そういう中で池田先生は、「学生が中心」「教育が中心」といわれたのです。しかもその教育とは、「人間教育である」と。こういう方針を、新しい大学、創価大学のビジョンとしたのです。池田先生の指摘は、今日、実に先見の明に富むものと証明されております。すなわち今日、文部科学省をはじめ、多くの大学が学生の教育に力を入れようと力説しているのです。また、学生中心のキャンパスづくりになっているのです。創価大学は、大学改革の先駆を切っていたといえると思います。

創価教育とは

(1) 人間教育——全体人間の育成

では、人間教育とは一体何でしょうか。この問題についてお話していききたいと思います。私は、教育学の専門ではありませんので、教育論的な、教育学的な立場から「人間教育とはこうである」と論ずるつもりはありません。折々、創立者池田先生から伺った話を私なりにまとめて、「人間教育とはこういう形に凝縮されるのかな」という点をまとめてみたいと思います。

最初に、人間教育とは「全体人間の育成である」ということになると思います。池田先生は創価大学が開学する2年前に、創価学会の第32回本部総会で「創価大学は、(中略)社会をリードしていく、英知と創造性に富んだ『全体人間』をつくっていく学府でなくてはならない」と発表されました。

では、全体人間とは一体何であろうかということを考えてみたいと思います。結論的にいいますと、私は、「全体人間」とは、「知性と情熱」「理想と現実」「理念と実践」という3つがバランスのとれている人間ではないかと思うのです。すなわち、この3つというのは、意外に相反する側面を持っているのです。

第1に、「知性と情熱」の調和です。知性的な人間は、情熱や人間らしさ、優しさというものが欠ける嫌いがある。逆に、人間味が非常に溢れている人は、ちょっと知性がない場合もある。イギリスの有名な経済学者マーシャルは、“warm heart” “cool head”、すなわち、「暖かい心」と「冷静な頭脳」ということをいわれました。それに通じるものがあると思います。すなわち、知性という非常に冷静な頭脳を持っていながら、一面では人間らしい、何ともいえない温かい情熱に溢れている心がある。これがまず最初に大事なことではないかと思うのです。

第2に、「理想と現実」の調和です。理想主義に走る人は、案外現実感覚がない。夢ばかり追って、理想だけ追求している人は、現実的な地道な努力とか、現実的な計画とかが欠けている場合がある。逆に今度は、現実的な人はほぼ毎日小さなことばかりを追ったり、あるいは、金勘定ばかりしていて、大きな理想とか夢とか希望というものがない場合がある。すなわち、この理想感覚と現実感覚は、意外に相反するものです。この両面を調和よく、バランスが取れているということが大事です。

第3に、「理念と実践」の調和です。これは「思想と行動」というように置き換えてもいいと思います。すなわち、ものを考えることが好きな人、あるいは、理屈ばかりいつている人は、案外、行動力や実践力がない。話したり、自分が考えたりすることで、それで、世の中が動くものだと思ってしまう。逆に、行動力のある人は、意外に考えないで動き回る場合がある。どこに行ってしまうか分からなくなるんですね。行動力や実践力の陰には、必ず理念や思想といった指針になるものがなければならない。このように、私もそうなんですけれども、一人一人にあてはめてみると、観念論、あるいは、頭で考えることが好きな人は、実践力や行動力がな

く、そしてまた、実践的、行動的な人は、ものを考えていない場合がある。これも二律背反的な性格があるのです。

このように、「全体人間」というのは、「知性と情熱」「理想と現実」「理念と実践」の3つが備わっている、総合的な人間、調和のとれた人、ということをも指すのではないかと思います。池田先生は別の言葉で、「文武両道の人にならなければならない」ということをいわれますが、こうした点をさしているのではないのでしょうか。

(2) 創造性開発の教育

次に、人間教育とは「創造性開発の教育」といえるのではないかと思います。創造性の一番の根本には、自ら考えるという自立した精神、あるいは、屹立した人格が必要です。

開学の頃、創価大学の滝山寮生たちが、なんとかいい寮にしようと頑張っ、て、まず寮則を作ることにしました。できた寮則は立派なものでありまして、「門限は何時」などと細かく決められておりました。そして、寮生たちは完成した寮則を池田先生にお届けし、「私たちはこの寮則のもとに、寮を立派な伝統のあるものにして参ります」と報告しました。創立者はその寮則をご覧になりながらいわれたことは、「細かい寮則もいいけれども、僕だったらたった一条だよ。それは、『紳士たれ』だ。人間を外から規則で縛るようであってはならない。自分の心の中に、屹立した人格を持った、そうした紳士を育成する。それが大事なんだ。中国の故事にも、『法三章』とあるじゃないか。あまり細かい規則はよくないな。規則で人を縛るのは好ましくないと思うよ」といわれ、何よりも自立した精神を強調されたのです。

本部棟5階のロビーには、レオナルド・ダ・ヴィンチ像が置いてあります。なぜ、本部棟の5階にレオナルド・ダ・ヴィンチの像が置いてあるのか。創立者は本部棟ができた祝賀会の時に話されました。「ダ・ヴィンチは、イタリア・ルネサンスの巨匠である。そして、彼は画家であり、彫刻家であり、音楽家でもある。また、医者でもある。更に、建築家でもあり、化学者でもあり、数学者でもあり、また、発明家であり、数学者でもある。そして、作家であった。まさに、驚異的な力をダ・ヴィンチは持っていた。しかし、これは何も彼のことだけではない。彼の姿を通して、私は、一人の人間には無限の可能性が秘められている。その可能性、創造性を開くのが創大生であるということを期待したいんです」と。すなわち、「創価教育の真髄」は、一人一人の学生に備わっている無限の可能性を開きゆくことだと私は思います。

また、「草創の三部作に学ぶ」についてであります。創価大学の先輩たちは、草創の三部作を読み、勉強してきました。それは、草創期に創立者が入学式、あるいは、滝山祭の時に講演された3つのスピーチです。1973（昭和48）年4月8日の第3回入学式に、創立者は初めて正式に大学の式典に出席されました。その時、創立者は「創造的人間たれ」と学生に呼びかけられたのです。すなわち、「理想とすべきは創造的人間である」といわれました。さらに、1973（昭和48）年7月13日の第2回滝山祭では、「スコラ哲学と現代文明」という講演をされました。「中世のスコラ哲学が現代文明を切り開く原動力になったように、創価大学は新しい哲学をもって、新しい大学、新しい時代、そして、新しい文明を作ってもらいたい」と訴えられたのです。そして、1974（昭和49）年4月18日の第4回入学式では、「創造的生命的開花を」と訴えられました。「これからの教育は、智慧の開発。それこそが、教育の真髄である」といわれたのです。このように草創の三部作のいずれも、創価大学の根幹は、創造力のある学生を育成することにあると強調しています。このような教育に力を入れていくことこそ、創価教育であるといえると思います。

(3) 美利善の教育

そして、人間教育とは、「美利善の教育」、なかんずく、「善の教育」です。これは、牧口常三郎先生の創価教育学の伝統を引きながら、創立者の創価教育の真髄を述べられているものだと思います。創価教育というのは、「善の価値観」を植えつけていく教育です。「善の価値観」とは、人のため、社会のために尽くしていくという考え方です。

アメリカでは臨死研究が大変に発達しています。キューブラ・ロスという臨死研究者の研究に、次のような指摘がありました。ある人が亡くなる時、「瞬間的に自分の人生がビデオテープを逆転させたように、これまでのことが一瞬にしてよみがえってきた」というのです。その中には、「自分がお金持ちになったとか、偉くなったとか、社会的な名声を得たとか、そういうことは何も思い浮かばなかった。よみがえったのは、自分はあるの人に何をしてあげたか。自分はある人から何をされたか。そういう人間と人間の関係、触れ合いのことだけだった」というのです。創立者は、この研究を通して、「結局、人間というのは、最後は、人の心の中に何を残していくか。これで自分の人生は決まるんだ」という話をされました。同じような話のある映画俳優もいっておりました。「人間は死んだらどこへ行くのだろうか」という質問に対して、彼は次のように答えました。「それは生きている人の心の中に、自分というものが生き続けていく。結局、人間というのは、生前、人のため、社会のために何をやったのかということしか残らないと思います」と。人間教育とは、こうした「善の価値観」「利他の精神」というものをどこまで人の心の中に植えつけていくかということに尽きると思います。

換言すれば、「人を幸福にするための教育」が創価教育であり、人間教育なのです。教育とは何のためにあるのか。それは、学生や生徒を幸福にするためにある。人々に幸の種を植え付けていく。ここに尽きると思います。

(4) 「師」の心を継承する教育

最後に、創価教育、人間教育の柱とは、『師』の心を継承する教育ということです。すなわち、創価教育の伝統は、牧口先生、戸田先生、そして、それを引き継がれた創立者池田先生によって花開きました。ということは、創価教育を学ぶということは、創立者の心を継承し、発展させていく。師の心を受け継いでいくというのが、人間教育の核をなすのではないかと思います。

では、師の心、創立者の心を継承していくといっても、どういう部分を引き継ぐべきか。かつて創立者は、「大学の使命とは何か。それは権威の人を出すことではない。実力の人、知性の人、そして、民衆に奉仕する信念の人を育成することである。これが大学の使命である。そういう意味で、私は知性の人を作りたい。実力のある人を育成したい。これが私の切なる願いであり、そのために、私は毎日、真剣勝負なんです」といわれました。さらに、「英知がなければ、権威、権力の悪も見破れない。人にも尊敬されない。自分の確かな軌道も進めない」とも強調されました。創立者は、「民衆に奉仕する、知性のある人を育成する」ことを大きな目標とされているのです。

また、師の心を継承するということについて、創立者はいろんな角度で話されていますが、ひとつ大切なことは、「師弟というのは、師匠が決めるものではない。弟子が自分自身で選び取り、自分自身で決めるものです。これが師弟の真髄をなすんです。従って、弟子で一切が決まる。弟子がどうかで師匠の偉大さが決まるんです。私は恩師・戸田先生、また牧口先生の構想を実現すると決めたんです」という指摘があります。創価教育、人間教育の真髄は、師匠から

いわれてやるものではない。弟子が自らの決意と信念でもって、その師匠の精神、思想、理念を実現していく、大きく社会に展開していくことだと思います。

以上、「創価教育とは何か」という問題について、4つの観点からまとめさせていただきました。

創価教育を担う立場

(1) 人間教育を担うには

では次に、「創価教育を担う立場の人はどうあるべきか、何に留意すべきか」という問題について考えてみたいと思います。

先に、人間教育という話をさせていただきましたが、「人間教育を、実践するものとしては、どうあるべきなのか」。この点について、以前、創価大学の岡安博司顧問にうかがったことがあります。それは、顧問が、創立者池田先生に「人間教育とはどういう意味でしょうか」と質問されたそうです。すると、創立者は、「自ら人間革命に取り組んでいる人が教育に取り組むこと、それが人間教育である」と答えられたそうです。また、創立者ご自身も「教育を実践していくには、教育方法や教育学の改革は大事けれども、根本的には教育者自身の人間革命がなければならない。教師自身が、たゆまず自己教育していくことが不可欠となる」と書かれております。じつに、人間教育を担う者の根本的な姿勢としては、日々、自らが向上していく、前進していくということが大事だと思います。

(2) 教育者のあり方

次に、創立者がよくいわれることですが、「教育者は心広く、そして、表情豊かでなければならない。また、声が生命である」ということです。創立者は、「一般に学校の先生は、面白くない人が多い。なぜかというと、まず表情がない。何かしてあげても、嬉しいんだか楽しいんだか、喜んでいるのか悲しいのかわからない。まるで、能面のようだ。それでは子どもの教育はできない。学生を育成することはできない。教育者というのは、何よりも心が広くなくてはいけない。また、表情が豊かでなくてはならない。そして、声が生命である」といわれたことがあります。また、次のようにも指摘されました。「教育者は自らが高みに立っていて、学生や生徒を見下ろすような、『我一人尊し』『我一人偉し』『お前たちはついてこい』というような姿勢ではいけない。学生や生徒のところへ降りて行って、ともに笑い、声をかけ、励ますことが大事だ。教育者はいつも学生や生徒といっしょにしなければいけない」と。

かつて、池田先生がイギリス大使と対談された時、大使は、「家に帰ってくると、必ず子どもと話をします。その時は、椅子に座って、子どもと視線を同じにして話をします」といわれました。話の内容は、『今日、自分がどういう仕事をしたのか』という大人に話すことと全く同じ内容を報告します」ともつけ加えられました。それを聞かれた池田先生は、「これは大事なことです。教育者は視線を子どもと同じくし、また子どもを子どもと扱わず、一個の人間として尊重していく。これが教育の要です」と強調されました。

池田先生が卒業された富士短期大学の高田勇道先生の言葉ですが、「教育とは学生に生命を捧げゆくことである」ということです。池田先生はこれを受けて、「学生のために、生命を捧げゆくという、この姿勢が大事です。教育者や学校の先生が、自分の子どもとか、自分の親族とか、自分の一族を大事に思ったら、もうおしまいです。自分の子どもよりも、生徒や学生の方が大事である。我が子よりも、生徒や学生のために自分の生命を捧げゆく思いで、教育に当たっていくことが肝要です」といつも強調されます。創価教育を担う人たちは、こうしたたゆまざる

自己革新、生徒や学生に対する献身、これらに立脚した教育姿勢が問われるのではないかと思います。

教育の「核」をなすもの——問われる教員の資質

それでは、教育の「核」をなすものは一体何でしょうか。それはひとえに教員の資質であると思います。さらに、その資質とはどのようなものでしょうか。

第1に、「学ぶことの楽しさを教える——教員の学力」ということです。「学ぶということは、こんなにも面白いのか。学問をするということは、こんなにも自分の境涯を開くことなのか」というように、学ぶことの楽しさを教えるということが一番大事なことだと思います。それには、何よりも「教員の学力」がポイントになります。自らが学び、自らが楽しい、その楽しさを学生と共有できるような形が好ましいと思います。かつて、創立者はいわれました。「教育は、教師と学生が共に楽しいと思ったら成功なんだ」と。この学ぶことの喜び、楽しさを教えることが重要です。

第2に、「自信と勇気をもたせる——教員の人格」ということです。青春時代とは、迷いであり、悩みの時です。また、最近の学生の傾向としては、「自分が何に向いているのか分からない。自分が将来、何になって良いのか見えない」。すなわち、「自分自身が分からない」ということがあげられます。目標に迷う学生がいるのです。そういう時に、学生に対して自信と勇気を与えられるかどうか。私は重要な点だと思います。それにはなんといっても、「教員の人格」が大きな影響を与えます。

第3に、上記の問題と関係しますが、学問を通し、「将来の生き方がみえてくる——教員の視野」ということです。「学生が将来、自分は何をやったらいいのか」ということが見えてくるようになることが大切です。それには「教員の視野」というものが、決め手になります。大学の教員は、自分の専門分野については深いかもしれないが、視野が狭い。専門外のことや、一般のことについては、見えない場合がある。そのため、一部の教員の話の聞いていると、将来がこんがらがってくるとか、将来がわからなくなってくるといような声も聞こえてくる。そこを教員としていかに努力していくかが大事です。自分でわからないことは、人を紹介するかあらゆる工夫をして、学生が進むべき道を見えるようにしてあげる。これが大事ではないかと思えます。

ともあれ、こうした問題に加え、教育の「核」という問題については、さらに次の3つの点があると思います。

第1に、大学の目的は何といっても「知識を伝授する所」にあるということです。知識がなければ、世の中の仕組みが分からない。そのため、意外なところで損をしたり、失敗したり、過ちを犯してしまったりする。「知識の伝授」というのが、大学教育においては、ある意味において非常に大事な、基本的な問題であるといえましょう。

第2に、単に知識を伝授するだけではなく、その知識をいかに智恵に転換するか、智恵の開発ということが大事です。知識をもとに、学生自らがどのように物事を考え、そして、新しい道を切り開いていくか。そのような智恵への転換をはからなくてはなりません。教員には知識を伝授し、なおかつ、伝授した知識の上に智恵の開発をどのように促していくかという技術が要求されます。

第3に、ある意味では、知識や智恵よりももっと大事な「人格の陶冶」という問題です。すなわち、いくら知識があっても、いくら智恵に優れていても、肝心の人格に欠点があったなら

ば、何のための学問か、何のための教育か分からなくなってしまう。「知識」「智恵」「人格」の3つが備わって、私は初めて「教育が完成する」のではないか。この3つを教員が与えていけること、それが創価教育の真髄ではないかと思います。創価教育を担う教員は、こうした力を持たねばならないということを私は創立者から教わりました。

大学発展の要因

創価教育を担い、創価大学の発展を期すために、「大学発展の要因」ということについて確認しておきたいと思います。今日、世界において一番名だたる大学というと、私たちはすぐに、アメリカのハーバード大学を思い浮かべます。ハーバード大学ができたのは、17世紀です。アメリカの建国以前でした。わずか9人の学生を迎えての出発でした。このハーバード大学が本当に世界一流の大学になったのは、じつは20世紀に入ってからだとの説もあります。それは、エリオット学長 (Charles William Eliot, 1869-1909学長在職) が「ハーバード大学を世界一にしよう」と教員、学生に呼びかけたところから躍進が始まったといわれております。では、エリオット学長は、何を教職員並びに学生に訴えたのでしょうか。

第1に、「建学の精神」を堅持しようです。エリオット学長は、「ハーバード大学の建学の精神をもう一度、軸足にすえ、これをもとに大学を発展させよう」と訴えたのです。すなわち、大学発展の一番の原動力は、どこまで「建学の精神」を堅持するか、大学としての軸足を固め、根を張っていくか、ここにポイントがあるのではないかと思います。

第2に、エリオット学長が訴えたのは、「教員の魅力」です。「教員が魅力を持たなければならない。そこに学生がついていく」のです。池田先生も「最高の教育環境は教師である」とよくいわれますが、「教員の魅力」こそ、学校や大学の発展の鍵なのです。

第3に、「学生の活力」の発揮です。「社会に奉仕しよう。また、社会で活躍しよう」という「学生の活力」がハーバード大学躍進の原動力となったのです。

このように、以上の3つがハーバード大学躍進の主な原動力といわれております。私は、これに加えて、創立者が今日の大学というのは、「環境、施設が整っていなければならない」という点を挙げておきたいと思います。「充実した施設、設備」を備えるということは、科学技術が発達した今日においては、大学にとって必要な要件です。「創価大学は、研究と教育の為の最高の環境と最新の設備、施設を整えていこう」と創立者はいわれ、学生ホール、本部棟をつくられ、次の構想としては、新総合体育館、新総合教育棟の建設というような計画を打ち出されております。学生が誇りを持って、また、快適に学べるようにとの配慮からです。創立者は1999 (平成11)年8月にいわれました。「これからの大学、学校というのは、最高のサービス機関でなければならない。『よく来ていただきました。よくいらっしやいました』というように、最大のサービスをしていくことが大事なんだ。教員や職員がふんぞり返って、『何しに来た』というような態度を取ったらおしまいである。学生を温かく歓迎していく雰囲気が、キャンパスにみなぎっていかなければならない」と。そして、「父母に対して安心感を与え、『ああ、創価大学に預けておけば、もう大丈夫だ。本当に子どもたちをここまでよく育成してくれた』という感謝の気持ちをもってもらうようにすることが肝要である。学生とともに父母を最大に大事にしていく精神が重要なのです」と。私は「大学発展の要因」について、ハーバード大学の例を述べながら、創立者の今まで打たれてきた点について紹介しました。それらは、非常に似ているということにお気づきのことと思います。創価大学の次の発展は、これらの創立者の思いをしっかり受け継ぎ、それを具体化していくことにかかっているとよいでしょう。

個人的な決意

こうした創大の発展の中で、私には常に身に帯している個人的な決意がございます。それは、私が創価大学に来てから、折にふれて創立者からお聞きした忘れがたい指針です。

1つは、1970（昭和45）年11月のことです。私が創価大学の助手として、教員の端くれとして採用していただいたことを、創立者にご報告する機会がありました。創立者は喜んでくださると同時に、一言、仏法の観点から次のようにいわれました。「『されば日蓮が法華經の知解は天台伝教には千万が一分も及ぶことなけれども難を忍び慈悲の優れたことは恐れをも抱きぬべし』。私の精神はこれです」と。すなわち、「仏教の目から見ると、天台・伝教は仏教を極めた最高の学者です。日蓮はその天台・伝教には仏教学という点においては足元にも及ばない。だけど、『難を忍び、慈悲に優れていることは』、すなわち、どんな困難な問題が起こってこようが、それに負けずに、また、全ての人々を救うという慈悲の優れている点においては、私は天台・伝教には絶対に負けない」と日蓮はいつているのです。創立者は「学者だからといって、いい気になってはいけません。学者だからといって、学に溺れてはいけません。どれだけ一人の民衆のために、一人の学生のために尽くせるか。それが一番の根本なんだ」といわれたのです。その時、創立者は「どんなことがあっても、学生から離れてはいけませんよ。教師が学生から離れたら、もう教育はおしまいなんだ」と指摘されました。これが私の第1番目の指針になりました。

2つは、創価大学が開学して間もない1972（昭和47）年、あるいは、1973（昭和48）年の頃だったでしょうか。当時、創立者は大学に来られると、すぐに卓球とかテニスをされました。ある時、私は創立者が卓球をされているところを、すぐそばで見えておりました。その時、創立者はするどい球を打ち込まれ、相手の学生が球をそらしている間に、ぱっと横を向かれ、私と目が合いました。当時、私はガリガリに痩せ、青白い顔をしておりました。創立者の眼には、「頼りない教員だな」というように映ったんでしょう。創立者は一言、「君の講義は、創価大学で一番面白い、一番上手いといわれるようになりなさい。そのような力をつけなさい。人間は人をひきつける魅力にあふれていなければいけない」と指摘されたのです。私にとって、これはその後の大きな指針になりました。

3つは、1976（昭和51）年6月30日のことです。1964（昭和39）年6月30日に、創立者は「創価大学の設立構想」を発表されました。たまたま、1976年の6月30日という日に創立者が大学にお見えになっておりました。その時、学生部長であった篠原誠顧問（故人）が創立者に「今日は、創立者が創価大学の設立構想を発表された日です。その設立構想を発表した場に、当時、学生として参加していて、今、教員になっている人がおります」と報告しました。すると、創立者は「すぐその代表の人を呼びなさい」といわれまして、私は何人かの人と創立者のもとにまいりました。すると、創立者は、「嬉しいね。青春の日の誓いを忘れずに、どこまでも一途に突き進んで行く人が、人間として一番尊いんだよ。青春の時の決意を忘れてはいけません」と激励してくれたのです。以来、私は「創大の教員になれたあの時の感動を常に胸中に燃やす」ようにしております。

以上、紹介しました3つの点は、私が創価大学の教壇にたっている時、変わらざる指針として胸中に焼きついているものです。

創立者の思い

最後に、「創立者の創価大学、創大生に対する思い」という点を確認しておきたいと思います。

第1に、創立者は「未来を築くということは、結局は、人間を作るということである。今いる人間をどういう人に育てるか。それによって、未来は決まるんだ。それには教育しかない。教育は、未来を創造する聖業である」とよくいわれます。創価大学の「出発の庭」にある枝垂桜。1971（昭和46）年2月11日に、創立者が竣工式の時にそれを植えられました。その時、「時代がどんなに激動し、どんな時代が来ようとも、一切は人間で決まるんだ。どういう人間を作るのか。これによって未来は決まるんだよ」と話されたことが、今でも私には忘れられません。

第2に、1977（昭和52）年7月17日、第6回滝山祭が行われた時、創立者は最後にマイクを手にとって、次のようにいわれました。「私の夢は何かといえば、私自身、生涯の大きい仕事が終わったならば、この大学の付近に住ませていただきたいということであります。そして創大生の成長しゆく姿、創大生の21世紀へ向かう、その雄々しい、凛々しい姿を見守りながら一生を終わりたい。これが私の念願であり、夢であります」と。

第3に、創立者が「新・人間革命」で創価大学のことについて書かれた最後のところです。2004（平成16）年3月20日付けです。これはあまりにも有名です。「私には、創大生がいる。もしも、戦い、倒れようとも、創大生がすべてを受け継ぎ、発展させていってくれる。そう思うと、勇気がわいた。力があふれた。どんな試練にも耐えられた。どんな苦しみも、莞爾として乗り越えることができた」と記されております。創立者は創大生がいたから、どんな試練をも乗り越えて、今日までやってきたといわれたのです。創立者の創大生を思う心情、また、創価大学を重視する気持ちは、この一言につきています。

最後になりますが、人間は、過去は変えられません。過ぎ去ったことはどんなに悔やんでも嘆いても、変えることはできません。しかし、自分自身と未来は、いくらでも努力によって変えることができる。過去は変えられないけれども、未来はいくらでも開いていくことができる。自分自身をいかようにでももっていけます。私は、創価大学で学んだ、また、働かせていただいた34年の日々を思いながら、明日に向かって、大学と学生の無限の可能性と創造性を、断じてさらに開いていこうと決意しております。

以上、私が34年の間に、創立者からお聞きしました、さまざまな創立の心というものを、その一端でございますが、ご紹介させていただきました。ご静聴ありがとうございました（大拍手）。

（本稿は、2004年5月12日の講演を加筆・訂正したものです。）